

全身 翻訳家

こどもなげに 便利を作る
新しいソフトウェアが
社会で意味を持つように

みつだ なるき
満田 成紀

満田 成紀 MITSUDA Naruki / 戦略情報室 室長 (教授)

【和歌山大学着任】1996年【学位】博士(工学)【学歴】京都大学工学部~同大工学研究科情報工学専攻
【研究キーワード】ソフトウェア開発環境、ソフトウェア工学、ユーザインタフェース
【所属学協会】観光情報学会、電子情報通信学会、日本ソフトウェア科学会、情報処理学会



24音、24行、24時間—— ソフトウェア工学は現場主義

「FM-7」——青少年は興奮した

高校の入学祝いに、8ビットパソコンを手に入れた。『ASCII』誌掲載のプログラムをテンキーで打ち込み、レーシング・ゲームを楽しんだ。夜行列車で秋葉原へ乗り込みフロッピーディスクとドットプリンターを仕入れてからは、クラスの演劇脚本の清書を任されたこともあった。志望先は、情報工学科のある京都大学一択だった。

浪人生活の準備が整ったところへ1本の電話が。「ドイツ語かフランス語か選べ」まさかの補欠合格だった。意気揚々の新生活、のほろほろだが、KMC(京大マイコンクラブ)が忙しすぎて大学に行く暇がなかった。ゲームよりスケールの大きいものをと、プログラムを書きまくった。例えば3音しか出ないパソコンを8台つなげて、24音の音楽を奏でた。高中正義のスライドギターを再現すべく自分でピッチを変え、家電量販店の前でデモ演奏した。そのプログラムを、先輩から咎められた。

「80×24行の画面」——プログラムは、美しく書け

「なぜ24行以内で書かない?」プログラムは、端末の画面に収めて一目で把握できるサイズに。それ以上長いプログラムは分けろ。俄然、ソフトウェアの作り方に興味が沸いた。プログラミングの授業が増え、課題のたびに、このコード汚いな、良くないな、と提出期限を越えて書き直した。プログラムは人間にとっての共有財産だと気付き始めた矢先、研究室配属目前で留年が決まる。

皮肉にも、留年中に始めたカラオケスナックのバイトで研究の神髄を掴んだ。お客から「君も好きな曲を」と促されて熱唱し、ママさんに叱られたのだ。それからは軍歌を覚え、おつまみの作り方を覚え……価値観は自分の側に置くものでないと教わった。思えば、興味があるのはコンピュータの中身でなく、コンピュータと人間との翻訳作業=ユーザインタフェースの方だった。利用者の求めるものは何か、イメージを共有するためのコミュニケーションの言葉を、今もいちばん大事にしている。

「キャンパスは紀伊半島全域」——和歌山大学の新しい舞台

ぶらくり丁のフリーWiFi実験を担当した2000年以降、和歌山をフィールドにさまざまなソフトウェア開発に携わってきた。忘れられないのはセーリング競技のサポートシステム。レースは朝8時から夕方5時まで海の上という過酷さで、実験はクリスマス寒波に襲われ、腹筋がけいれんを始めて……その経験から24時間持つバッテリーを搭載し、海面ギリギリのGPSから丘に電波を飛ばせる装置が完成。和歌浦湾でのインターハイ定常開催が決まった。「現場は自然と闘ってるんですよ、いま取り組んでいる農業も同じ」柑橘農家のニーズに応えるには、Uターンできない山道を実際に体験することが欠かせない。しかも、現場から求められていることをそのままやるのではなく、ニーズを知ったうえで自分がいいと思うものを提案することが肝腎だ。

システム工学部から戦略情報室に異動して、今では大学そのものが研究対象になった。教育、研究、大学経営に関わるデータを分析し、情報をどう見せるか。「楽しいっすよ!」相手に伝わる言葉にこだわってきた名翻訳家の、腕の見せ所である。



1967年新潟県生まれ。全国の高校で唯一の「醸造科」教員だった父が教材をガリ版刷りしていたので、教科書は自分で作るものと思っている。広島出身の父の被爆体験を聞かされた日に、自分は最低でも2人分は生きようと思った。自分も教員になってみてひとこと。「大学の教員は、教えちゃダメ。自分の学んだことがいかに魅力的か、それを24時間考えるのがどれだけ楽しいかを話すだけでいいんじゃないかな」